

# 奈良山発掘調査報告 I

## — 石のカタト古墳・音乗谷古墳の調査 —

### 第 I 章 序 言

#### 1 調査のあらまし

この報告は、京都府相楽郡木津町・精華町と奈良県奈良市にまたがる地域に計画された平城ニュータウンの造成に先立っておこなわれた発掘調査のうち、古墳に関するものを抽出して正式報告書として刊行するものである。ニュータウン計画は、延べ600haに住宅18000戸を建てるというものであった。

これら一連の調査は、京都府教育委員会と奈良県教育委員会が日本住宅公団から委託を受け、それを奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ依頼したものであり、費用は日本住宅公団大阪支所が負担した。

発掘調査に先立って、1964年と1965年に分布調査がなされている。これは、以後の調査及び保存計画を立案するための予備調査であり、若干の周辺部も含めて事業地内に所在する遺跡に対して通し番号をつけることとなった。その中には、従来から遺跡名のついているものや、この調査の成果を受けて新たに名づけた遺跡名をもつものもある (Fig.1)。

調査計画

このうち第8号地点については、1970年に奈良県教育委員会内に平城団地内第8号地点調査委員会を設けて、同年7月から8月にかけて発掘調査を実施し、瓦窯3基を確認した。これが奈良山第53号窯である (八賀・西村1971)。ただ残念なことに、この遺跡は保存協議中に破壊されてしまった。

その後、1972年度には、両府県にまたがって7月3日から翌年1月12日まで予備的な調査が実施された。それは、計12の地点で実施され (第2号地点の押熊瓦窯跡では瓦窯6基、第12号地点の歌姫西瓦窯跡では瓦窯6基と須恵器窯2基)、そのほか5ヶ所の遺物採集地点の踏査もおこなわれた。このうち、4ヶ所は事業地外にあり、別の1ヶ所は所在が不明となったので、予備調査はおこなわなかった (奈良県教委1973)。

1972年度の  
調 査

このときの調査のうち、本報告の対象となるのが、第20号地点の音乗谷古墳と第13号地点・第15号地点の計3遺跡である。

続く、1973年度の調査は10月18日から11月16日までおこなった。内訳は、奈良市歌姫町で散布地を3ヶ所、京都府相楽郡木津町で2ヶ所 (うち1ヶ所が第9号地点の音如ヶ谷瓦窯) であるが、その中には本報告の対象となる遺跡はない (奈良県教委1974)。

1973年度の  
調 査

1978年度の  
調 査

その後、造成工事の遅れにともなって発掘調査もしばらく中断していたが、1978年度になってようやく調査が再開された。調査の対象となったのは、前2年度にもれた地点と再調査が必要とみなされた地点であった。未調査地としては第6、7、14号地点、そして、再調査として第5、9、13号地点がとりあげられ、1979年1月8日から3月31日にかけて6地点で計2800㎡が調査された。そのうち第9号地点の音如ヶ谷瓦窯では1973年度の成果とあわせて瓦窯と排水溝、作業場等の関連施設など生産遺跡の全体構成が明らかになった点が多い（京都府教委1979）。

1978年度の調査の中で本報告の対象となるのが第7号地点の石のカラト古墳の調査と第13号地点の補足調査である。

## 2 奈良山周辺の歴史的環境 (Fig. 1)

木 津 川

奈良盆地の北に位置する平城京のすぐ北側は、低い起伏の豊かな奈良山丘陵が広がっている(PL.1-1)。三重県伊賀地方から西へ流れきた木津川は、この丘陵の前あたりでほぼ直角に折れ、旧巨椋池へ向かって北流する。この屈曲点付近へと南から流れ込む鹿川、西から流れ込む山田川などによって奈良山丘陵の北東に狭いながら沖積地が形成されており、丘陵裾部からこの沖積地にかけて多数の遺跡がみつまっている。

なお、奈良山の範囲に現JR関西本線が裾を走る東側の丘陵も含める立場もあるが（京都府埋文1999）、本書では奈良山丘陵といえば鹿川以西を指す名称として用いることとする。

奈良山丘陵に、古代の瓦窯をはじめ多くの遺跡が存在することはかなり早くから知られていたが、ニュータウン造成に先立つ調査によって平城京に関連するさまざまな遺構についての知見が大幅に増加した。そして、その後も主として京都府側での調査が進み、木津地区内の東側の丘陵を含め一帯の様相がかなりわかってきた。それらも含め最初に、周辺の遺跡の様相を概観しておこう。

このあたりの土地利用がさかんになるのは弥生時代からである。その中心は音乗谷古墳のすぐ東に広がる大島遺跡で、弥生時代中期の竪穴式住居や方形周溝墓がみつまっている。その西側には扁平鈕式銅鐸が出土した相楽山遺跡がある。その後の後期の住居址は上人ヶ平遺跡でも確認されている。

古墳時代に入ると、木津川の対岸に椿井大塚山古墳、少し離れて稲荷山古墳、平尾城山古墳などの著名な前期大型古墳が造られるが、左岸での目立った古墳の造営はそれらに遅れ、4世紀後半の瓦谷1号墳を嚆矢とする。これは、右岸の造営主体とは系譜を異にする勢力による造営と思われるが、使用している埴輪は奈良山丘陵を挟んだ反対側、佐紀盾列古墳群西群で使用されている埴輪と同一のものであり、そこからの供給を受けたと考え方がよい（京都府埋文1997a）。

独立の古墳としては目立ったものはその後しばらくなくなる。しかしその間も瓦谷遺跡で佐紀盾列古墳群において使用されている埴輪と同工の埴輪が埴輪棺として搬入され続けていることから、両地域の関係は継続していったことがわかる。なお、2005年度に調査された内田山B1号墳をはじめ、5世紀前半の中小規模古墳なら瓦谷遺跡よりさらに北側の丘陵上に営まれている。

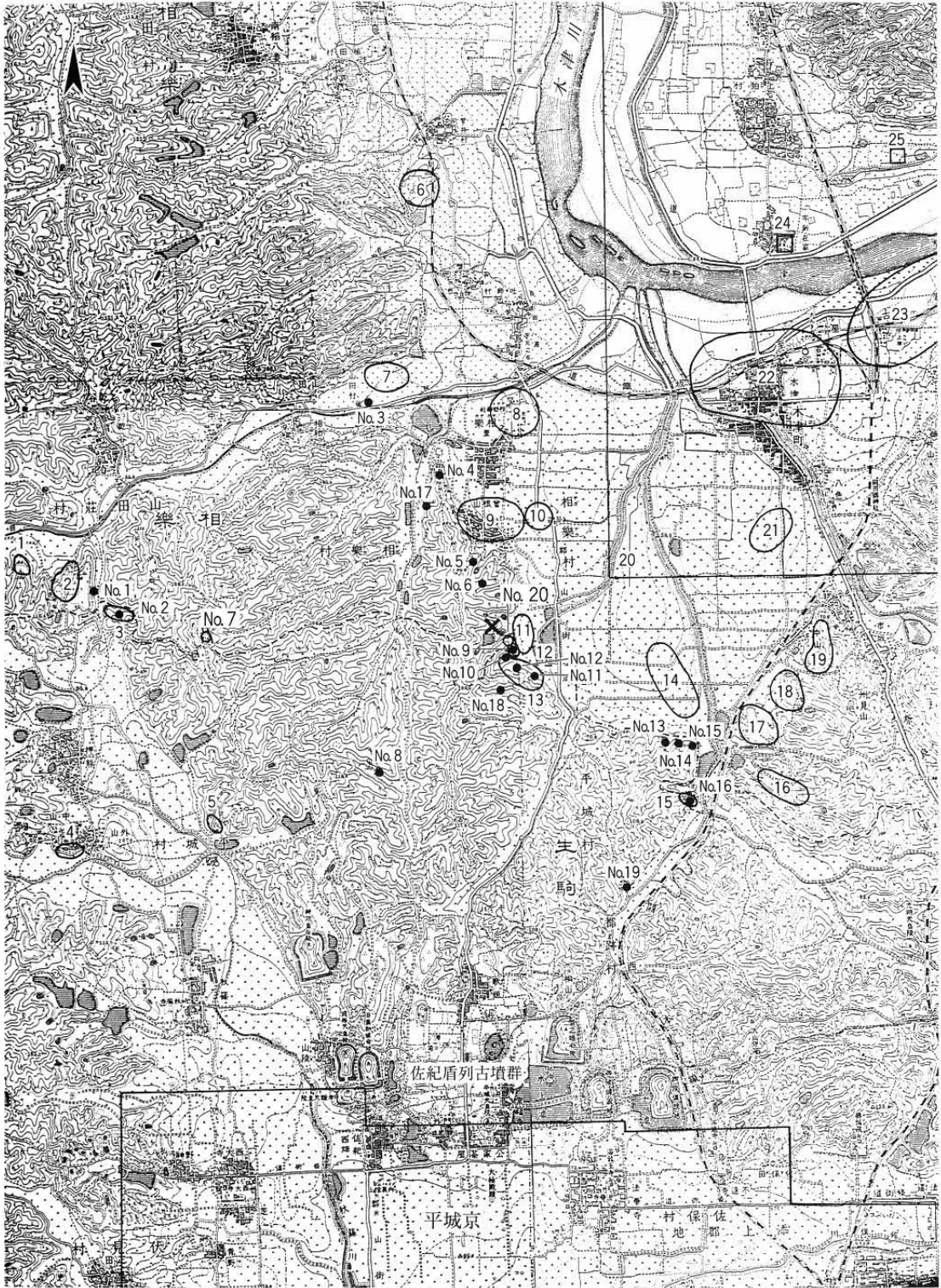


Fig.1 奈良山周辺の遺跡 1:40000

- |             |                  |              |          |               |
|-------------|------------------|--------------|----------|---------------|
| 1. 得所瓦窯跡    | 2. 乾谷瓦窯跡         | 3. 押熊瓦窯跡     | 4. 中山瓦窯跡 | 5. 奈良山51・52号窯 |
| 6. 吐師七ツ塚古墳群 | 7. 樋ノ口遺跡         | 8. 相楽遺跡      | 9. 曾根山遺跡 | 10. ハヶ坪遺跡     |
| 11. 大島遺跡    | 12. 音如ヶ谷瓦窯跡      | 13. 歌姫西瓦窯跡   | 14. 弓田遺跡 | 15. 歌姫瓦窯跡     |
| 16. 瀬後谷瓦窯跡  | 17. 上人ヶ平遺跡・市坂瓦窯跡 | 18. 瓦谷遺跡・1号墳 | 19. 西山遺跡 | 20. 恭仁京右京     |
| 21. 八後遺跡    | 22. 木津遺跡         | 23. 上津遺跡     | 24. 泉橋寺跡 | 25. 高麗寺跡      |
- No.7 石のカラト古墳    No.20 音乗谷古墳    ×銅鐸出土地点(相楽山遺跡)

No.1～No.18は平成ニュータウン予定地内調査地点。明治45年発行大日本帝国陸地測量部作製 2万分の1測量図を元に作製。

木津地区の  
遺 跡

5世紀中ごろになると、再び瓦谷遺跡に隣接する上人ヶ平遺跡で古墳の造営がさかんになる。これは群集する形態の中小規模墳であるが、規模に比べて埴輪が豊富である。そして、それらの埴輪を焼いた窯も同地区でみつかつていて、瓦谷遺跡で3基、上人ヶ平遺跡でも3基が調査されている(京都府埋文1991)。細かな供給関係は不明だが、木津地区の丘陵上が5世紀後半にはひとつの埴輪生産地となっていたもようである。ただし、それは6世紀まで続くものではない。

この埴輪窯跡と関連して、弓田遺跡が注目される(京都府埋文1997b)。流路から多量の埴輪が出土した遺跡で、古墳ではないことから埴輪の製作、出荷に関係する遺跡であった可能性が指摘されている。

これらとほぼ同時期に精華町側では木津川が北流を開始する地点の左岸で吐師七ツ塚古墳群が築かれる(梅原1933)。これは、帆立貝形古墳と方墳からなる古墳群で、上人ヶ平古墳群とは異なる勢力の墓域とみなされる。

ところで、第13号地点と第15号地点で見つかった古墳は、これらとほぼ同じか若干遅れる5世紀後半～末に築造されたもので、JR関西本線と国道24号線が抜ける鹿川の狭い谷を挟んで上人ヶ平古墳群と指呼の間にある。後に試みるようにその関連性は、弓田遺跡出土品とともに埴輪の分析によってある程度明らかにできるであろう。

その後、木津町内では顕著な遺跡が少なくなるが、第20号地点の音乗谷古墳がまさにこの段階の遺跡を代表する存在として出現する。本例を除くと歌姫横穴をはじめ丘陵南側の陶棺出土遺跡が目立つくらいで(小島・北野1959)、6世紀から7世紀前半にかけての古墳の動向については丘陵内においてはほとんどわからなくなる。

奈良山丘陵  
の生産遺跡

そして、7世紀中頃から地域の様相が一変する。すなわち、奈良山丘陵内に須恵器の窯が築かれるようになるのである。歌姫西地区に位置する第10～第12号地点での調査例が該当する(奈良県1973)。主として都城へ供給する瓦の生産が活発におこなわれるようになるという当地域のその後の歴史を考える上で、まず須恵器窯が都城の形成に先立って営まれていたことは重視すべきだろう。ちなみにこの時期と思われる方位が北で西に25度振れる大規模な建物遺構が西隆寺周辺で平城京の下層で検出されている(奈良市2001)。

この前史を受けて、以下で報告する石のカラト古墳と相前後する時期から、一帯での遺跡が濃密になる。石のカラト古墳を除くと、丘陵地内では圧倒的に瓦の生産遺跡が多いが、いっぽう低地部に集落遺跡も見られるようになる。窯跡は奈良山丘陵内では、得所瓦窯跡・乾谷瓦窯跡群・押熊瓦窯跡群・中山瓦窯跡・奈良山51・52号瓦窯跡などの丘陵地の西側や中ほどに位置する遺跡と、音如ヶ谷瓦窯跡群、歌姫西瓦窯跡群、歌姫瓦窯跡など丘陵の北東裾に築かれたものに大きく分布が分かれる。そして、鹿川を越えて、沖積平野の東に展開する丘陵裾にも瀬後谷瓦窯跡群、市坂瓦窯跡などが築かれた(京都府埋文1999)。

奈良時代初期には西側の窯跡で平城宮で使用する瓦がもっぱら焼かれたが、時代が下がるにつれ東側の諸窯跡でも宮所用瓦が焼かれるようになり、東側の木津地区では京域や特定寺院に供給する瓦が生産されるようになるということがわかっている。

集落遺跡としては、前述の大畠遺跡と弓田遺跡で奈良時代の遺構がみつまっているほか、上津遺跡では平城京への物資の運搬に関わる官の木屋所がみつまっている。この上津遺跡を含むかたちで、恭仁京跡計画ラインが丘陵間近にまで広がっていることが知られる。

### 3 調査組織

調査は奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が担当した。以下に本書で取り上げた発掘調査に関わる責任者と担当者を明示して掲げ、他の参加者は一括して記載する（\*が担当者）。

**第7号地点（石のカラト古墳）**      所長 坪井清足      部長 狩野久      金子裕之\*  
伊東太作 岩本正二 岡本東三 木全敬蔵 佐藤興治 清水真一 立木修 西村康

**第13号地点**      所長 内山正      部長 坪井清足      黒崎直\*  
井守徳男 小笠原好彦

**第15号地点**      所長 内山正      部長 坪井清足      黒崎直\*  
小笠原好彦 真木礼子

**第20号地点（音乗谷古墳）**      所長 内山正      部長 坪井清足      高島忠平\*  
伊東太作 井守徳男 岡本東三 小野昭 佐原真 佃幹雄

報告書作成のための整理作業は2003年度から2ヶ年計画で実施した。遺構、遺物の考古学的整理作業と検討については平城宮跡発掘調査部考古第2調査室が担当し、金属製遺物や玉類の観察や分析については埋蔵文化財センターの保存修復科学研究室・飛鳥藤原宮跡発掘調査部の協力を得た。遺物の写真撮影については写真資料調査室が担当した。

本書で報告する内容は、すでに京都府教育委員会・奈良県教育委員会より石のカラト古墳については『奈良山－Ⅲ 平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』1979、音乗谷古墳と第15号地点については『奈良山 平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』1973、そして第13号地点については上記2冊で逐次概要が報告されているほか、石のカラト古墳については巽淳一郎「石のカラト古墳の調査」『奈良国立文化財研究所年報1979』でも概要を載せている。また、石のカラト古墳の調査成果を広く人々に知らせることになったのが、奈良国立文化財研究所飛鳥資料館で1979年9月に開催された飛鳥時代の古墳展であり、猪熊兼勝・大脇潔・津村広志の編集による図録『飛鳥時代の古墳』が刊行されている。

本書の編集作業は、平城宮跡発掘調査部長岡村道雄の指導を得て同部考古第2調査室の高橋克壽がおこなった。執筆は文末に記名した第V章の4を除いて高橋がおこなったが、第2章については調査の担当者であった現飛鳥藤原宮跡発掘調査部長金子裕之の所見を聞きながら進めた。実測は高橋のほか、今津朱美、橋爪朝子、宮崎美和が担当し、図面の製図は大半が橋爪の手によるが一部高橋がおこない、宇野隆志（京都大学大学院生）・森下智恵（立命館大学大学院生）が補助した。

執筆に際しては、以下の所属を付記した方々をはじめとして多くの方々のご教示を得た。相原嘉之、西光慎治（明日香村教育委員会）、小笠原好彦（滋賀大学）、井上裕一（早稲田大学）、江口桂、塚原二郎（府中市教育委員会）、黒崎直（富山大学）、辰巳和弘（同志社大学）、坪井清足（元興寺文化財研究所）、橋口達也（九州歴史資料館）、古屋毅（東京国立博物館）、江浦洋、小栗明彦、上林史郎、岸本圭、車崎正彦、杉井健、谷正俊、田畑基、筒井崇史、中居さやか、中島彰、中島

藤二、藤井幸司、藤沢敦、穂積裕昌、宮崎康雄、森田克行（敬称略）

なお、石のカラト古墳発掘調査中の主な来訪者は以下の方々である。

秋山日出雄、網干善教、有光教一、石野博信、泉森皎、上田宏範、小野山節、亀井正道、河上邦彦、川西宏幸、工藤雅樹、梶国男、小出義治、小林行雄、進藤秋輝、末永雅雄、関川尚功、堤圭三郎、藤間生太、澄田正一、菅谷文則、伊達宗泰、田辺昭三、都出比呂志、直木孝次郎、中谷雅治、西山要一、樋口隆康、前園実知雄、松下正司、本村豪章、森浩一、和田晴吾、渡辺誠（50音順、敬称略）

#### 参考文献

- 飛鳥資料館1979『飛鳥時代の古墳』飛鳥資料館図録第6冊  
梅原末治ほか1933「吐師七ツ塚古墳発見品」『京都府史蹟名勝天然紀年物調査報告』14  
奈良県教育委員会1974『奈良山-Ⅱ 平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』  
京都府教育委員会1979『奈良山-Ⅲ 平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』  
京都府埋蔵文化財調査研究センター1991『京都府遺跡調査報告書』第15冊 上人ヶ平遺跡  
京都府埋蔵文化財調査研究センター1997a『京都府遺跡調査報告書』第23冊 瓦谷古墳群  
京都府埋蔵文化財調査研究センター1997b「弓田遺跡第2次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概要』第74輯  
京都府埋蔵文化財調査研究センター1999『京都府遺跡調査報告書』第27冊 奈良山瓦窯跡群  
奈良県教育委員会1973『奈良山 平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』  
小島俊次・北野耕平1959「奈良市歌姫町横穴」『奈良県史蹟名勝天然紀年物調査抄報』第12輯  
奈良市教育委員会2001『西隆寺跡発掘調査報告書』  
奈良市史編集審議会1968『奈良市史』考古篇  
八賀晋・西村康1971『奈良山第53号窯の調査概要』平城団地第8号遺跡調査委員会

#### 記

・第7号地点（石のカラト古墳）は、平城第115-4次調査6 SNR-7にあたり、6 PIKの遺跡略称をもつ。これに対して第20号地点（音乗谷古墳）、第13号地点、第15号地点は平城次数外調査であり、それぞれ6 SNR-20、6 SNR-13、6 SNR-15にあたるが、音乗谷古墳だけは4 POJの異称をもつ。

・奈良山地区の図面等管理用に遺構にふられた台帳番号を以下に記すが、本文中では使用していない。

石のカラト古墳：石櫛→SX01、墓道→SX02、墳丘→SX03、外周平坦面→SX04、墳丘下暗渠→SD05、最外郭溝→SD06、外周平坦面上溝→SD07。

音乗谷古墳：石室→SX10、排水溝→SD11、墳丘→SD12、掘割り→SX13、長方形土坑→SK14。第15号地点：墳丘→SX15、周溝→SX16。第13号地点：埴輪列→SX17

・石のカラト古墳は1987年に復元整備がなされ（PL1-2）、1996年に国史跡に指定されている。